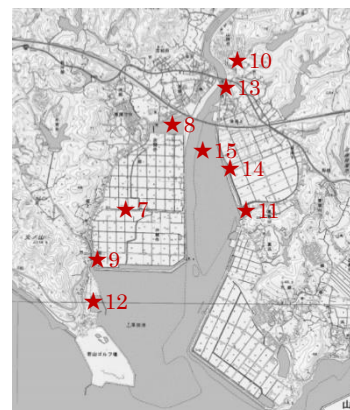


第2章 厚狭川河口

厚狭川は、美祢市於福の大々峠を水源とする約44kmの二級河川で、吉部田沖から周防灘へと流れていきます。

厚狭川河口付近はほとんどが江戸時代以降に造成された開作地で、昔と変わらない開作地の風景が広がっています。

また、厚狭川橋からは厚狭川河口の広い干潟が見え、堤防からは川の中洲や水田に集う野鳥の様子を観察できます。



写真位置図

国土地理院地図



- ① 沖開作 (安政4年 (1857))
 - ② 古開作 (弘化4年 (1847))
 - ③ 後潟開作 (宝暦2年 (1752))
 - ④ 黒崎 (黒葉山) 開作 (明治5年 (1872))
 - ⑤ 南高泊干拓 (昭和26年 (1951))
- ※年号は汐止めまたは工事着手の年
- ※「スマイルコースト・ウォーク」の進行順に沿って付番
- ※①②を総称「梶浦開作」という。

1. 河口の人々の暮らし

(1) 開作地の風景と歴史

厚狭川河口は、江戸時代から明治時代にかけての開作や昭和の干拓により造成された土地で、夏は稲の青々とした鮮やかな田園が広がり、秋には黄金色の稲穂が揺れる情緒あふれる開作地らしい風景が広がっています。



夏の田園風景 沖開作 令和6年(2024)8月上旬撮影 ★7



秋の田園風景 沖開作 令和6年(2024)9月下旬撮影 ★7

秋の田園風景ドローン映像



厚狭川河口付近には開作に関連する神社や記念碑、遺構があり、それらは地域の人々の生活に深く関わっています。

厚陽小中学校前に広がる古開作溜池は、梶浦開作地の灌漑用水池として造られました。溜池の中島にある巖島神社の御神体は、梶浦開作の鋤初めのとき三鋤目に掘ったかき殻が付いた油石であると伝えられています。現在の場所には明治17年(1884)に建立されました。開作地の安全を祈る鎮守です。



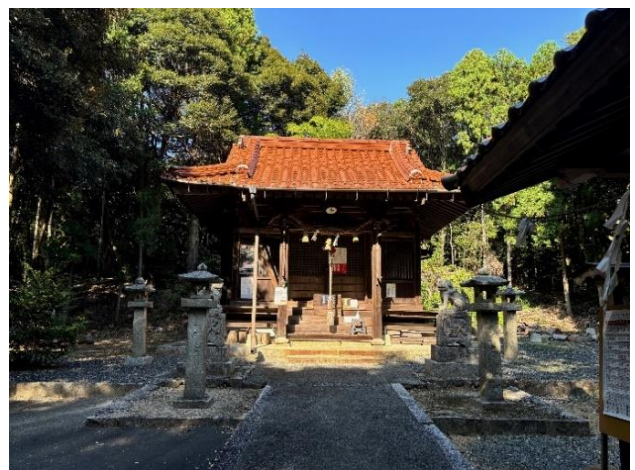
古開作溜池と巖島神社 令和7年(2025)撮影 ★8

沖開作の鎮守は、始め古開作の巖島神社でしたが、のちに分離して慶応2年(1866)6月17日に安芸の宮島から新しく神様を迎え祀り、龍神社の小祠を建てました。社地を転々とし、現在は沖開作西南隅に鎮座しています。側には、明治43年(1910)5月25日に建てられた、厚狭郡沖開作干拓記念碑があります。



龍神社と厚狭郡沖開作干拓記念碑
令和7年(2025)撮影 ★9

綿津見神社は、後潟開作の鎮守で、宝暦2年(1752)に厚狭川にかかる厚狭川橋にほど近い高須の川土手に創建されましたが、厚狭川の洪水に悩まされ、安永6年(1777)に現在の場所に遷りました。八大竜王社と称していましたが、明治4年(1871)に現社名に改称しました。土手まつり(10ページ)の神事は、この神社で行われています。



綿津見神社 令和6年(2024)撮影 ★10

後潟開作二挺唐樋は、後潟開作の堤防の最東端にあった排水用樋門で、2枚の招き戸を備えていました。海側の樋門は、平成20年（2008）に高潮対策のため沖合に護岸が作られた際に埋没保存され、現在は遊水地側の樋門跡のみ見ることができます。

埋没保存された二挺唐樋の海側の樋門 年未詳
(『小野田市史 民俗と文化財』より転載) ★11

現在も残る二挺唐樋の遊水地側の樋門跡
平成20年(2008)★11

後潟・高泊村では、江戸時代は農業が主体でしたが、海岸干潟で貝類の採集や干潟漁・網漁あみりょう いとなを営むものもありました。明治には海苔の養殖が始まり、大正2年（1913）末の記録たいしょうによると、多くは農業の合間に漁業を行っていたようで、農閑期に行われる海苔養殖は格好かつこうの副業ふくぎょうだったようです。

梶浦全景 昭和 22 年 (1947)
(厚狭図書館蔵) ★12

高浜の海苔生産風景 昭和13年(1938)
(歴史民俗資料館蔵)

(3) 生活に欠かせなかった渡し船

昭和2年(1927)に厚狭川橋が開通する以前は、厚狭川の右岸と左岸の行き来は渡し船を利用しており、現在も「渡場」という地名が残されています。大正から昭和にかけては、通勤者や通学者などで、渡し船の利用客は1日に400人くらいあったと言われています。

右岸側の渡しは吉部田・渡場の共同経営で、船も岸辺の番小屋も共有でした。左岸側の船は、営んでいた庄屋の屋号から「大黒屋渡し」と呼ばれていました。双方が2日ずつの交代制をとり、大雨の日も雪の日も年中無休で運営されていました。

左岸にある大黒屋渡しの名残から、当時の情景が目に見えます。



厚狭川左岸の渡場跡 令和7年(2025)撮影 ★13

コラム② 梶浦船頭小三郎 ～毛利勅子の送迎役～

厚狭川河口にある梶浦は、厚狭毛利家にとっても重要な場所だったようで、防衛の拠点、海上交通の拠点と位置づけられていたようです。その土地柄、梶浦の人々は、漁と船頭の仕事で生計を立てていた人が多かったと推察されます。

梶浦の住人に小三郎という人物がいました。小三郎は、慶応元年(1865)1月に、厚狭毛利家の正室勅子が徳山へ行った際に船頭として働きました。その働きぶりは大変丁寧だったので、仕事を終えると「金二百疋」が与えられました。

しかし、勅子が徳山から厚狭へ戻ってくる際に問題が occurred。厚狭毛利家より梶浦から船頭2人を徳山へ向かうように命じられますが、漁を行っていることを理由に誰も行くことができませんでした。そのような事情の中、徳山へ向かったのが小三郎でした。当時の記録をみると、自らの意思で徳山へ向かったと考えられます。

3月10日、3名の厚狭毛利家家臣と「御進物」をのせ梶浦を出発。3月27日に徳山で勅子をのせ、4月2日、無事に勅子を下津まで送ることができました。その功績により5月、「一代苗字※」の使用を許されました。船頭小三郎のように、古記録には少ししか登場しない人物も忘れてはならない歴史上の人物なのです。

※一代苗字…その人に限り、公に苗字を名乗ることを許されること。

2. 土手まつり

毎年8月12日に、厚狭川の川上、川下の二手に分かれて後潟開作の土手の枯れ草を焼く「土手まつり」が、令和元年（2019）まで行われていました。堤防の決壊を起こす悪霊を払ったり、稲につく害虫を火におびき寄せて焼いたり、追い払って駆除したりする目的で始まったと伝えられています。暗闇に赤々と浮かび上がる姿と白くたなびく煙の一文字焼きの荘厳な情景は、地区の住民にとって夏の風物詩でもありました。

令和2年（2020）以降は、行事の形態を変え、土手の草の一部を事前に刈り取り、綿津見神社の神事の際にお焚き上げを行って、地区の無事と五穀豊穰を祈願しているそうです。



土手まつり 令和元年（2019）撮影（個人提供）★14

3. 鳥が集う場

厚狭川河口には干潟が広がり、河口流域の水田面積が広いことなどから、冬はクロツラヘラサギやガン、カモ、春や秋はシギ、チドリの飛来地として、県下有数の場所となっています。

干潟や水田、古開作溜池などには年間を通じて様々な野鳥が訪れ、バードウォッチングに最適です。これも、厚狭川河口に開作が行われ、水田が広がったこの地区ならではの風景です。



古開作溜池に飛来したクロツラヘラサギ
令和元年（2019）撮影（個人提供）★8



厚狭川河口中州にたたずむチュウシャクシギとウミネコ
平成28年（2016）撮影（個人提供）★15